

優 秀 賞

命の産声

土浦日本大学中等教育学校

二年 青 木 楓

五月は命が輝きだす季節だ。この時期になると、命ある全ての生き物たちが、競いあうかのように、命の産声をあげていく。

例えば、土。空から雨が降りそそぎ、地中の静かなる命の塊にそつと声をかける。すると、それらは少しずつ、命の鼓動を打ち始める。やがて、地中からやわらかな双葉を出し、産声をあげるのだ。

私の弟がまいた種子もそうだった。弟は、今年の春、小学校に入学した。小学校行事である、一年生を迎える会の中で、上級生からもらったものだ。その種子は、毎年在校生が育てたもので、種子を採り歓迎会でのプレゼントにしている。何年も前から引き継がれているもので、私が入学したときも、上級

生からプレゼントされ持ち帰り、一生懸命に育てたことは忘れられない思い出の一つだ。弟は嬉しそうに学校であった事を母へ話し、早速家のプランターへ種子をまいた。弟は、毎日、毎日、庭のプランターを眺めては、お気に入りのカエルのジョウロで水をかけていた。水をかけながら、

「はやく芽がでてこないかなあ。いつになったらでてくるんだよ！」

と話しかけていた。その姿はまるで、さるかに合戦のカニの様だった。数日後、弟は、歓声をあげた。待ちに待った、アサガオの双葉がたくさんでていたからだ。私もその様子を見て、うれしかったし、微笑ましくも思った。それと同時に、アサガオの脈々と受け継がれる命の力強さを感じ、産声を聞いたような気持ちになった。

水は生命の源である。どんな生物も、その命を育くむ為には、絶対に必要な存在であると考ええる。アサガオの種子は、土の中に埋めただけでは発芽しなかった。鳥や魚もそうだ。水が無ければ生きていけないどころか、子孫を増やすことすらできない。す

なわち、人間を含め命ある全ての者に、水は必要不可欠な存在であるのだ。

その反面、水には生命を脅かすほどの大きな力がある。日本中を恐怖と哀しみの渦に巻き込んだ東日本大震災。大地震が日本を襲い、その衝撃で、地面が抉れ、沿岸部では大津波が押し寄せた。木々は倒れ、建物は破壊され、人々や家畜等までも呑み込み、深く冷たい海へと引きずりこんだ。震災による死者、行方不明者は約二十万人、建築物の全半壊は合わせて四十万戸を優に超えた。そして未だに避難所で生活している人々が数多くいる。私たちが住んでいる所では津波の被害はなかったものの、道路は地割れが起き、何日も停電や断水が続いた。その影響により、飲料水や食料の確保にとっても苦労したと家族から聞いた。私は幼かったので記憶はあまりないが、昼夜問わず大きな揺れが続き、とても怖かったことだけは覚えている。

こういった経験を通し、自然の圧倒的な力に恐怖を感じた。更に人間の無力さを知り、人間はその力の前に成す術も無いことを痛感させられた。

人間は知恵や技術を基に地球上の至る所で大きく開発を進めてはいるが、こういった壮大な力の前には、只々無力であるしかない。人々は長い歴史のなかで、水を求め、奪い合い、争うことも多くあったが、人類を含め地球上に住む生物は、この自然によつて生かされていることを忘れてはいけない。

今日も弟のアサガオは、朝露に葉を濡らし、五月の風に揺れている。